※史料の傍線は全て引用者が付したもの

【史料1】

就雲・芸間之儀、言上之趣委曲被聞食訖、過来儀互止宿意、以聖護院門跡(道増)申之通、同心可為肝要候、猶晴忠(大館)・晴舎(進士)可申候也

十一月二日　(足利義輝)(花押)

尼子修理大夫(晴久)とのへ

(『出雲尼子史料集』九八七号「佐々木文書」)

【史料2】

芸州・雲州和談之事、堅申曖候上者、石州表之儀、互止意趣、幾重茂無事之段、尤可然候、但達而存分之儀候者、幸聖護院門跡御逗留候条、具可相談候、更以失面目候事不可在之候、無別儀於相調者、天下静謐之基候也

四月四日　(足利義輝)(花押)

毛利陸奥守とのへ

(『出雲尼子史料集』一〇一六号「毛利家文書」)

【史料3】

然者雲州遣置候人質、去二日引手候而同二日現形仕、因茲赤穴右京亮(久清)同意仕、泉山去渡候、波根山城守・池田藤兵衛尉(久利)以下懇望候、鰐(石見)走城牛尾太郎左衛門尉(久清)明退候、温泉(石見)要害同然候、其外或明退、或降参仕候条、石州之事無残所任悴存分候、雲・伯之内茂敵城所々一味中仕取候、尼子方・我等和平之事、連年被成御下知候条、万端致堪忍、奉応上意候之処、豊州(大友氏)衆於豊前門司及鉾楯候刻、福屋(隆兼)荷推候而再乱ニ企歴然候、聖門様(道増)御在国候て被成御証明候時如此候上者、向後不可相届之段覚悟之前候、於愚意者既捧一通啓上候つ、聖門様淵底被知召候事、非我等聊尓緩怠之段、弥御披露所仰候、於様体者追々可令啓達候間、先以不能詳候、恐惶謹言

(永禄五年)六月廿三日　隆元　御判

元就　御判

(『出雲尼子史料集』一一五七号「閥閲録遺漏」)

【史料4】

(包紙ウハ書)「　備中守

棚守左近衛将監(房顕)殿　御報　隆元」

尚々彼是委細之趣者、自恵閑所可申候〳〵

出張之儀付而御祈念之巻数送給候、謹而令頂戴候、弥御懇祈憑存候、随而雲州表之儀、三沢(為清)・三刀屋(久扶)・桜井現形候て、中郡(大原郡)至原手境、完戸(隆家)・山内(隆通)・多賀山(通続)打入候、此口之儀、至塩冶(神門郡)・島根境、来廿八日可相動覚悟候、吉左右重畳可申述候、猶必従是可令申候、恐々謹言

(永禄五年)七月廿三日　隆元(花押)

(礼紙切封ウハ書)「(墨引)　備中守　隆元」

棚守左近衛将監殿　御報

(『松江市史』史料編4中世Ⅱ一〇九八号「厳島野坂文書」)

【史料5】

(前欠)

因州武田・備中三村・備後衆、至富田境差寄候、当国之事者、至塩冶・原手・中郡・三沢、此方一味候之条、相究富田一所候、然間此時可仕詰覚悟候、乍恐可御心安候、此等之趣自然之時者可被達上聞事可畏入候、此由可得御意候、恐々謹言

(永禄五年)九月十八日　隆元(花押)

元就(花押)

三好筑前守殿　御宿所

(『出雲尼子史料集』一一七九号「毛利博物館諸家文書」)

【史料6】

就今度籠城、別而御祈念、祝着候、為新寄進、於大芦内五拾俵令社納候、弥入魂肝心候、仍寄進状如件

永禄五年九月廿六日　義久(花押)

御崎殿

(『出雲尼子史料集』一一八〇号「日御崎神社文書」)

【史料7】

其表様体銘々示給候、具令承知候、然者毛利元就一類于今令在陣、取詰之由候条、弥無油断以調略不抜足之様、御才覚肝要候、仍豊前目之儀、過半属案中候、此節義久(尼子)於申談者、自他永々可為静謐之条、各別而可被励忠儀事専一候、猶重々可申候、恐々謹言

(永禄五年)十二月廿三日　宗麟(花押)

森脇孫三郎殿

(『出雲尼子史料集』一一九七号「吉川家文書」)

【史料8】

(包紙ウハ書)「　米原平内兵衛尉(綱寛)殿　宗麟」

至防長一行之儀、預入魂候、得其意候、如承候、芸州事、此砌差寛候者、於向後茂一雅意不可有止事候之条、自他申談、可取詰覚悟、非油断候、然者勝久御一家再興此節候之間、各別而有馳走、被遂本意肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言

(永禄十二年)五月十七日　宗麟(花押)

米原平内兵衛尉

(『出雲尼子史料集』一四四六号「松原家文書」)

【史料9—1】

態以使者申候、尼子牢人共、以但州催差集、致一揆之企由、雑説候、依之、定而其国地下人等可相騒候間、不可有油断之由、久修并番衆中へも申遣候、別而貴殿御馳走之儀、憑申計候、悉皆貴所御入魂可為祝着候、委細猶此者可申候条、不能多筆候、恐々謹言

(永禄十二年)六月十二日　元就(花押)

原太郎左衛門尉殿　進之候

(『出雲尼子史料集』一四四七号「原家文書」)

【史料9—2】

急度令申候、尼子諸牢人一揆相催之口(由)候、其表之儀、無御油断御心遣可為本望候、猶委細此者可申候、恐々謹言

(永禄十二年)六月十三日　輝元(花押)

山中治部少輔(就安)殿

三戸源十郎殿　御旅所

【史料10—1】

日御崎大明神

奉寄進

出雲国神門郡於宇龍津、北国船勘過・駄別・諸役等之事

右意趣者、今度毛利乱入国中、既当家断絶之処、従但馬国凌遠海、至于島根忠山切渡、数剋之構勝負、亡大敵、雪会稽恥畢、然国家鎮安泰也、顧彼等冥慮、奉寄付之条、於末代、聊件役不可有相違候、若雖為他輩企競望者、其罰争免、況於子孫有違犯族者、且失冥顕加被、且為先蹤不孝、者、全社務、可被専祭礼修造者也、仍寄進状如件

永禄拾二年九月拾五日　孫四良源勝久(花押)

御崎検校殿

(『出雲尼子史料集』一四七八号「日御碕神社文書」)

【史料10—2】

宇龍浦新串之内着津舟、并北国船勘過・駄別・諸役等、被寄付日御崎仁御意趣者、毛利一族之者共、就当国乱入、当家断絶之以来三・四ヶ年(ママ)、然今度佐々木勝久、為散其欝胸、従丹州以舟数百艘至島祢着岸之刻、防戦雖及数度、敵無得利乍敗北、国家静謐畢、

併大明神之依加彼力也、爰以至子々孫々彼役之儀、全不可有相違、若於末代違犯之輩者、立可被蒙神罰事指掌訖、仍被仰出旨如件

永禄十二九月十五日　　山中鹿介　幸盛（花押）
立原源太兵衛尉　久綱（花押）
目賀田新兵衛尉　幸宣（花押）
松田兵部丞　誠保（花押）

日御崎検校殿

（『出雲尼子史料集』一四七九号「日御碕神社文書」）

【史料11】

今度上口雑説候、就其富田現形衆之内、表裏之者共候ハヽ、為彼衆中之内涯分聞立、抽忠儀者別而可成褒美候、得其心其方短息肝要候、謹言

（永禄十二年）七月三日　　元就（花押）
「　野村信濃（土悦）入道殿　　元就」

（『出雲尼子史料集』一四四九号「野村家文書」）

【史料12】

御上以後、某許之趣不被申越候、定而不可有珍儀候歟、弥無心元之条、米原（米原綱寛）平并坂（坂元貞）少六頓被差上候、此衆中勿論隆重有相談之、早速静謐之才覚干要候、富田城無人之由候、咲止此事候、至隆重天野木工助事差上候、此表之儀、彼是相含候、聊無其油断短息此時候、重々可申候、恐々謹言

（永禄十二年）七月十三日　　小早川隆景（花押）
野村信濃（土悦）入道殿　進之候

（『出雲尼子史料集』一四五〇号「野村家文書」）

【史料13】

熊申候、某元事、各堅固之覚悟誠大慶之至候、粉骨之段無申計候、仍雲伯忿劇付而在所近辺相破之由、朦気口惜候、此節其表之儀、以馳走相拘候者、静謐之上ニて一所可進之候、弥忠儀肝要候、尚香川美作守可申候、恐々謹言

（永禄十二年）七月廿一日　　輝元（花押影）
元就（花押影）

安達十兵衛尉殿　進之候

（『出雲尼子史料集』一四五三号「香川家文書」）

【史料14】

夜前、馬木・河本・湯原以下手返付而、旁我等雖令動遣候、各御堅固之覚悟無異儀候、向後弥元就・輝元様江可忠儀候事可為御同前候、然者大小共ニ無二申談可遂馳走候、如此申定候上者、一切不可存別儀候、若於偽存者、起請文略

永禄弐年九月廿四日　　天野紀伊守隆重
同　雅楽允元友
同　木工助元成

野村信濃（土悦）入道殿

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一二八三号「毛利氏四代実録考証論断・諸家証文写」）

【史料15―1】

大社御領之内、富方当知行并定連歌免林木之内橋爪名一名之事、被任晴久御判形之旨（御一通）被成御寄進、勝久被成〇御判形候、此旨不可有相違之由、被仰出候、仍状如件

（永禄十二年）十月一日　　目賀田新兵衛尉　幸宣
立原源太兵衛尉　久綱

富兵部大夫殿

（『出雲尼子史料集』一四九七号「富家文書」）

【史料15―2】

大社御領之内、富方当知行并定連歌免林木之内橋爪名一名事、被任晴久御判形之旨、勝久被成御一通候、此旨不可有相違之旨被仰出候、仍状如件

（永禄十二年）拾月一日　　山中鹿介　幸盛
横道兵庫助　秀綱
松田兵部丞　誠保
目賀田新兵衛尉　幸宣（花押）
立原源太兵衛尉　久綱
山中鹿介　幸盛（花押）
横道兵庫助　秀綱（花押）
松田兵部丞　誠保（花押）

富兵部大夫殿

（『出雲尼子史料集』一四九六号「富家文書」）

【史料16―1】

大社為定連歌免林木橋爪名一名寄進之所、如前々不可有相違候、無懈怠可被相勤事可為肝要之状、如件

永禄十二十月朔日　　勝久（花押）

富兵部大輔殿

（『出雲尼子史料集』一四九四号「富家文書」）

【史料16―2】

大社御領之内当知行之事、晴久一行之旨、不可有相違之者也、仍状如件

永禄十二十月朔日　　勝久（花押）

富兵部大輔殿

（『出雲尼子史料集』一四九五号「富家文書」）

【史料17―1】

其方当知行、晴久任判形之旨不可有相違候、并百姓等抱分地頭へ不能案内沽却候者、売手・買手共ニ不可相立候也、如件

永禄五二月十日　　義久（花押）

富兵部大夫殿

（『出雲尼子史料集』一一二七号、「富家文書」）

【史料17―2】

為杵築定連歌免、林木之内橋爪名之公用米参拾壱俵寄進候、末代不可有懈怠事肝要候、仍状如件

永禄五年五月廿七日　　義久（花押）

富兵部大夫殿

（『出雲尼子史料集』一一四七号、「富家文書」）

【史料18】

呉々御親父右京進（春綱）殿御取退候、寔太慶候、御入魂之儀と存計候御状到来祝着候、当城無緩被遂御在番之由、今度無二之御覚悟更以難申尽候、雲州衆高下共無正儀体候処、一篇之御届無比類存計候、弥可被抽御馳走候、仍去月廿八日中郡取出之、多久和両城即時切崩之、為初多久和大和守数百人被討果候、依之懸合（飯石郡）之内氷之上・禅定寺河副（久盛）相抱候城両所、并阿用（大原郡）・福富之要害落去候、即至三沢（仁多郡）・横田打越、既明日市（布）部（能義郡）・山佐取出、富田城内衆令参会、雲伯可廻行覚悟候、此時至伯州之境、高信（武田）御行肝要候、吉事追々可申述候、恐々謹言

（永禄十三年）
二月七日　　隆景　御判

湯原平次（元網）殿　御報

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一三〇七号「閥閲録115湯原文左衛門18」）

【史料19】

就十神（能義郡）不慮之儀、某許気遣推量候、此方各出張之儀候間、即時可任存分候、当城（満願寺城）之儀弥堅固可相抱事肝要候、恐々謹言

（元亀元年）
九月廿五日　　輝元　御判
元就　御判
隆景　御判

湯原右京進（春網）殿　進之候

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一三九五号「閥閲録115湯原文左衛門105」）

【史料20】

尚〳〵武安油断候ハヽ、為其方堅可申付候、おそく候へハ不入事候間、武安ニ此由可申聞候、某元舟之仕くミ相澄候ハヽ、其方神西江可罷越候、かしく

其方事頓罷出通、祝着之至候、辛労不及申候、然者警固之事、一日半日茂差急候ハね、無其曲之由、神西よりも従富田も申越候之間、早々可乗出事肝要候、就其武安所江重而申遣候、猶此者可申候、謹言

（元亀元年）
十月六日　　元就　御判

児玉与八殿

（『出雲尼子史料集』一六六二号、「閥閲録100児玉惣兵衛」）

【史料21】

（押紙）「元就公・輝元公与当家之老臣
書写来、芸州本書在於住広島
名井豊前守子孫之家　」

態申候、雲州万願寺山之儀、敵取誘付而、神西在陣（陣）衆罷出可仕崩之覚悟候、就其人数之儀追々申越候、左候条、旁々儀近比御辛労之至候へ共、銘々被成御出、預御馳走候者、可為本望候、此度之儀、於此方一入可為御扶助候、乍御不請此時急度御打出可目出候、為此以手次之間申候条不能詳候、恐々謹言

（元亀元年）
十月十五日　　輝元　判
元就　判

名井豊前守殿
木原刑部左衛門殿
坂井三郎殿
檜山丹後守殿
児玉越後守殿
財満兵衛尉殿

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一四〇〇号「平賀家文書」）

【史料22】

御折紙拝見候、仍去比新山之者共従本庄船引越、新山々下ニ置候由其聞候、然処去十六日夜忍寄、右舟二艘者至当城引取之、壱艘□者於新山麓被切破之由候、殊敵聞付雖付送候、仕退から〳〵橋迄引付御勝利由候、誠御馳走無比類候、剰大船候条、一段各辛労察存候、雖不及申候、可被成御褒美候、至吉田則可遂注進候、猶吉事重畳可申入候、恐々謹言

駿河守
（元亀二年）
正月十九日　　元春（花押）

（元封ウハ書）（元竜）
「多賀左京亮（元定）殿
長屋左近大夫殿　御返報」

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一四四〇号「多賀文書」）

【史料23】

其表方々江落人数多有之由候、余無正儀候、可被相留候、其子細者新山・高瀬依無通路、号退衆通路させ候之由其沙汰候、然上者、此以後之事ハ、諸口〳〵の退衆、可有誅伐之由申遣候、此以前退候者共之儀茂、自然武略状持候而ハにて候間、能々可被相究事肝要候、為其申候、恐々謹言

駿河守
（元亀二年）
正月廿三日　　元春（花押）

湯原右京進（春網）殿
□□□□□□
大垣八郎左衛門（秀康）殿
大野次郎左衛門（高直）殿

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一四四一号「閥閲録115湯原文左衛門108」）

【史料24】

（前略）
一、従勝久、備前へ被差上候、三輪入道事マメッ以御調略被呼抜之由候、さ候て新山・八橋・備前之内証、具被聞召之由候、肝要候、弥御尋候て、此方にも承、可成心得儀者可被仰越候（後略）

（『松江市史』史料編4中世Ⅱ一四七〇号「山田家古文書」）

【史料25】

雲伯立柄無是非候、雖御城被境目候、御賢慮之故、無異儀之由、其聞候、千秋万歳候、仍勝久・同諸勢、隠州江無恙之由候、亀鹿、但州江居住通候之条、添□□被仰合、早速可被遂御本意事、可目出候、然者尚春御入魂之趣、内々令披露候、丁寧之儀、御祝着之由、至各も其取合無疎□候、殊与州（ママ）表ニ兵船数百□被差渡候、為防長御行、如門司・赤間関口、諸軍勢被差立候、淵底湯七・御使僧存知之前候、其表之儀、弥堅固之才覚尤肝要存候、於旨趣者、従老中被申之段、直家可有伝達之条、令省略候、恐々謹言

（元亀三年）
六月廿日　　鑑信（花押）

牧兵庫助殿　御報

（『出雲尼子史料集』一七五二号、「石見牧家文書」）

【史料26】

長々被届、牢々粉骨不浅候、然間□□□諸□領・諸名職・諸買地并諸関所等之事、何茂違儀有間敷候、縦先□□之時、有主之領知成共、貴所御届之上者、少茂不可有別儀候、以此旨、于今無替御届肝要候、向後全不可有相違者也、仍如件

天正五
拾二月八日　　勝久（花押影）

［　　］□下

（『出雲尼子史料集』一七五二号「熊野神社文書」）